

Title	周易
Author(s)	本田, 濟
Citation	懷德. 1960, 31, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90348
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA











<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

周易

本田濟

易は中國の經書の一つであります。易、詩、書、禮、春秋、この五つが五經といひまして、儒教の最も中心になる神聖な書物とされております。經という字は織物のたていとのことでありまして、それからすじみち、人のふむべき道という意味になるのであります。で、易は、五經の中でも最もむづかしい、宇宙と人とを一貫した道を示すものということになつております。

經書は聖人によつて作られたものだという點で、よけいに權威をもつわけですが、易もやはり昔の聖人によつて作られたといわれております。易という書物は、本文と、その解説の部分——十翼という——とから成つています。本文は  とか  とかの形、いわゆる六十四卦と、それに附けられた文句とから成つております。この六十四卦は實は三本づつのものを上下に重ねてできたものでして、三本づつのは、 乾、 坤、 震、 巽、 坎、 離、 艮、 兌でありまして、ふつう八卦とよぶのがこれであります。この八卦を作つたのが太古の聖人伏羲、これを重ねて六十四卦にしたのが神農（伏羲とも禹とも文王ともいう）、文句をつけたのが周の文王（周公ともいう）、解説部分の十翼を作つたのが孔子というので、かように代々の聖人の手をへており、しかも内容がいかに玄妙で不可思

議である、また未來をも知りうる、こういう點で、易は五經の中でも第一に尊いものとされておるのであります。

しかし右のようなことは古來の儒者の言い傳えでありまして、今日そのまま受け取ることではできません。伏羲とか神農とかいう聖人は神話中の人物で實在ではありませぬ。周の文王が文句を作つたと申しますが、この文句も一時に一人の手でできたとは思われませぬ。孔子が十翼を作つたということも疑わしい。大體孔子の時代（西曆紀元前六一五世紀）に易がすでにあつたにしましても、孔子がこれを好んで讀んだかどうか。孔子の言行を記した論語の中で、はつきり易のことに觸れたのは一箇所だけであります。

加我數年、五十以學易、可以無大過矣

「我に數年を加え、五十以て易を學べば、以て大過なかるべし」天が私を長生きさせてくれて、五十から易を勉強したら、大きな過ちを犯さぬようになるだろう。この文章がもとになつて、史記にも、孔子が晩年易を愛讀して書物のとじ糸が三べんすり切れた、というような話が述べられ、十翼の作者とされるのであります。

しかし右の文章は、實は必らずしも孔子が易を好んだ證據にはならない。と申しますのは、右の文中の「易」の字を、魯の國の儒者は「亦」に讀む。つまり「亦」の假借と見るのであります。すると右の文は、

加我數年、五十以學、亦可以無大過矣

「……五十以て學べば、また以て大過なかるべし」長生きできて五十の手習いをして、私のようなものでも、大過がなくなろう、という意味になりまして、こちらの讀み方のほうがどうやら本當ではないかと思われませぬ。ともかく論語の右の文章が、孔子が易を愛讀した證據にはならない。

それに思想的にも孔子の考え方は易と必らずしも相い容れないところがあります。孔子は倫理道德の根源を、神から人間に移した點で大きな意味をもつています。古代では善し悪しは神の目から見ての善し悪しで、どうすべきかの道德的な判斷も、神意をうかがつて決定されてきました。ですから殷代（西紀前十八―十二世紀）には占いが全盛で、

巫が總理大臣にまでなつています。これは西周時代（前十二―八世紀）に入つてもある傾向でした。それが春秋時代（前八一―五世紀）になつて、神に對する信仰が前ほどでなくなり、人間の比重が高くなつて、孔子のような考え方になるわけがあります。孔子は神に對して尊敬は拂つておりますが、一應人間の生活から切り離して、そつとして置くことにしました。「鬼神を敬してこれを遠ざく」といつておる通りであります。いかにすべきかの決定は、ですから、人間の自身の良心によつてされねばならない。そして行爲の善し悪しは、結果でなくて、動機によつてきまると考えたようであります。「苟くも仁に志せば惡なし」と申しておりますのはそれで、動機が道になつておれば、結果はどうでも、その行爲は惡くない、ということでもあります。

ところで易はもとと占筮の書物でありました。占筮は一種の神意をうかがう手段でありまして、こういうたちの技術はすでに春秋時代の賢人たちが疑いを抱いているものであります。それに占いで、とるべき行動をきめることは、孔子の動機主義とは矛盾します。こういう點で孔子が易を好んだということはまず有りそうにない。ところで、一方、孔子は「天命を知る」ということを君子の條件にしております、これからすると易のような未來を知る技術を受け容れそうにも見えませんが、孔子の「命を知る」ということは、一種の悟りの境地、人事を盡したあととは笑つて運命を甘受するという態度を述べたものでして、占いによる未來予知とはかわりがない。こういうふうで易を孔子と結びつける確かな證據はないわけです。それに孔子に續く孟子（前五―四世紀）にしましても一言も易について言及しておらず、易がもとと儒教の經典であつたとは考えられません。

しからは易は本來何であつたかと申しますと、單なる占筮のテキストだつたとか考えられない。易經の本文の文句は、それ自體では別に深い哲學などを含まない、占いの判斷のことばでして、それも一時にできたものでなしに、古い卜辭の残りやおみくじの文句、それに諺のようなものを加えてできたもので、西周から東周にかけて（前十二―三世紀）のいつの間にかできて來たのでありましょう。周易の名稱にしましても、後には深い意味を含ませるように

なりましたが、もとは、周は國名の周、易は蜥蜴トカゲの象形文字で、おそらく占い者の同業組合が附けておつた標識、看板がとかけであつて、そこから彼らの使用するテキストの名稱にもなつたのだろうと想像されます。

ところで易が本来そのようなものなら、それがどうして儒教の經典になつたかが問題であります。一言で申せば、儒教のほうが変わつて来たからである。初期の儒家は政治とか倫理とか人間の身近かなことだけに力を注いでいました。それが戰國時代（前五世紀—三世紀）も末になつて、いろいろの學派の競争が激しくなると、それだけでは事が足らない。宇宙の構造とか、萬物の奥にある本體とか、天と人とを一貫する道とかの哲學的な問題が、新たに人々の關心事になつて來ておる。そういう時ですから、儒家の方でも何とか陣容を強化しなければ時代に取り残される。そこで古い占いの書物である易に、種々の哲學的な理論をくつつけて、新しく經典の列に加えたのであります。十翼というのは、このために作られたもので、これも決して一時に出來たものではない。中でも最も重要なのは繫辭傳で、これによつてこそ、易は經典とされるだけの哲學性を獲得したと申して過言ではないでしょう。易が經典になつたのは大體秦（前三世紀）から漢（前二世紀—後一世紀）の初めにかけてでありましょう。

以上、易經が聖人の作でもなんでもない、素朴な占いの書物であつたことを申しましたが、もとは何であつたにしましても、出來上つたものの價值にはかわりはない。以後二千年にわたる中國の思想の中に、易が大きな重さを占めたことは嚴然たる事實だからであります。

二

以下に、十翼を含めての易の考え方がどのようなものであるかを簡単に述べて見ます。

易の卦は一と二とで出來ています。爻こゝといひます。一は陽の爻、二は陰の爻であります。この陰陽というのは中國の思想の中でも重要な觀念でして、萬物を作る二種の元素であります。これは氣ともよばれますが、氣は氣體でして、

これが凝縮して液體にも固體にもなる。また氣は呼吸の意味でもあつて、生命源でもある。陰陽はこういう氣の二種で、無限に流動し、からみ合い、變化して、森羅萬象を形づくつていたのであります。繫辭傳では陰と陽の二元のまともになる原理を考えておりまして、これを太極とよんでおります。これは全く見えぬ本體、老子の無というふうなものであります。とにかく易では、宇宙を陰陽の無限の流動變化でもつて解釋する。世界を變化しつつあるものと見るのであります。

しかし變化するなかに、變化しないものがある。世界は變動してやまないけれどもその變りかたには目的に副つた變らぬ法則性がある、というのであります。これは太陽や月星の動きの法則性から思いついてのことでしょう。そして人事もすべて天の運行と平行すると見るのが易の考え方でありまして、こういうふうな宇宙を變るものと見、變る中に變らないものがあるとして、その變らぬものをどうしてつかむか。それはことばや倫理ではつかめない。象徴と數とではじめてとらえられるのであります。

易は象徴であります。八卦の形はすべてのものを象徴しうる。☰は父、天、馬……、☷は母、地、牛……、☱は長男、雷、龍……、☴は長女、風、鳥……というふうな。この八卦を組み合わせた六十四卦はさらに複雑な事柄を象徴する。卦につけられた文句もすべて象徴的に解せられる。たとえば☰師は戦争の卦であり、☵歸妹は結婚の卦であります。結婚のことを占つて必らずしも☵の卦が立つとは限らない、☱の卦が立つかも知れない。逆に戦争のことを占つた場合、☷の形が出るかも知れません。そうした場合は、それぞれの卦の戦争や結婚のことを述べた文句は、漠然とした象徴として受け取るほかはないのであります。

易はまた數でもあります。一は九、二は六とよばれます。卦を出すための筮竹の操作も神秘的な象徴的な數に關係してゐる。五十本の筮竹を用いて、そのうち一本は終始除いておく。これは太極にかたどる。四十九本を任意に左右二つに割る。これは天と地に象どる。右手の分から一本を取つて左手の小指にかける。これは人に象どる。それら

左手右手の分を四本づつ數えてゆくのですが、この四は四季にかたどる。左と右と各々の殘數は閏にかたどる。この殘數と左小指にかけた一本との總和は必らず九か五。これを除いた四十四本或いは四十本で同様の操作をすると殘數は八か四。もう一度同様にして得る殘數も八か四。これで殘數がたとえ九、八、四なら一、五、四、八なら一というように、求める卦の最初（一番下）の爻が得られ、これを六回くりかえしてはじめて卦が立つのであります。このような筮の操作の數理だけでなく、易にはいろんな數がつけられています。宇宙のなかの變りつつ變らぬもの、法則性がこのような數理でとらえられるというのは、天體の運行が數で解けることからの聯想でしょうが、もう一つには、中國における數というものが單なる抽象觀念でなくて、神秘的な感^{かん}じて受け取られているからでもあります。

ともかく易は象徴と數をもつていて、それによつて、宇宙の、また人事の秘密をたやすく解明できる。後漢の鄭玄じやうげんという學者は、易の名稱を解釋して、「易は一字で、變易（かわる）、不易（かわらぬ）、簡易（たやすい）の三つの意味を含む」と申しておりますが、これはいかにも中國的な面白い考え方であると思われま^す。

中國には天地の動きと人間界の現象とが相關係するという考え方があり、それは易の十翼にもはいつております。それですから、宇宙の奥にある法則性というものは、人間界のいろんな事柄についても存在する。つまり人間の運命はいかにも偶然な氣まぐれなように見えても、天地同様に、そのなかに法則性がある、ということになります。「天下の事何をか思い何をか慮らん。同歸にして殊塗。一致にして百慮。天下の事何をか思い何をか慮らん」天下の事は道はちがつても行きつく所は一つだし、あれこれ考えても結果は同じだから、何も思いわずらうことはないという意味で、まことに樂天的な考えであります。（樂天というのも易のことばですが。）

孔子らは運命というものを氣まぐれなもの、どうにもならぬものと考えました。人間善いことをしても必らずしも善い運には遇わないから。しかし易では「積善の家には必らず餘慶あり」と申して、道徳と運命とは矛盾しないを見る。むしろ、天も人もすべて大きな調和した法則性^{はつそせい}がその裏にあつて、それに乗つかり隨がうことが道徳だといふ

うに見ております。で、そのように人事にも法則性があつて、それが易の象徴や數で簡易にとらえられるから、當然未來のこと、吉凶のきざしも予見できるので、それを見て適當に行動すればよいということになります。これは倫理學說としてはずいぶん結果主義であることは否定できません。

しかしずるさということは處世の智慧の一つでありまして、易は、ですから、處世術のすぐれた教科書でもありません。易の卦の六爻には「位」というものがあり、上ほど高いのであります。☰乾の卦は龍がだんだん地中から天に昇つてゆくという象徴的な文句が附けられておる。一番下は「潛める龍、用いるなかれ」で、人間なら徳を抱きながら民間に隠れている状態。下から二番目は「見わたる龍田にあり、大人を見るに利あり」ようやく世に出て聖天子に認められる運勢。こうして昇つて行つて五番目が「飛ぶ龍天にあり、大人を見るに利あり」で、非常にめでたいそれなら一番上はどれほど良いかというと、「亢りたる龍悔あり」でかえつて悪い。つまり出世しすぎて昇りつめると危険なのであります。大體六爻の中で一番良い位は五、二である。一つの卦は上三本（外卦）と下三本（内卦）に分けられますが、五の位、二の位はそれぞれのまん中にあたる。つまり中庸を得た位が一番よくて、高過ぎては危いというのでして、易の術語で「中」と申しますが、これなどいかにもおとならしい處世智であります。

また位について「正」ということがある。下から數えて一、三、五の奇數位に陽爻一が、二、四、六の偶數位に陰爻一が来る場合を正、その反對を不正といいます。奇數は陽の數、偶數は陰だから。つまり強い者は強い位に、弱い者は弱い位にあるべきで、弱い者が強い位におるのはよくないということです。

右の原則でゆくと ☳ 未濟の卦は最悪になりそうですが、さほど悪くない。というのが内卦（上半分）と外卦（下半分）のそれぞれの、一、二、三が對應している。つまり通算して數えると、一が一なのに對して四は一、二が一なのに對して五が一、三が一なのに對して六が一と、陰陽反對の爻が上下相對している。これでよほど救われるから、六爻すべて不正であるのにあまり悪くない卦になつている。こういう關係を「應」といいます。人事でいえば上位者の

引きなどというようなことになりましょう。

このような原則は立てられておりますが、その實、これら必らずしもあてはまらない場合が多い。例外が澤山あります。これは易經の成立過程からして無理もないことであります。で繫辭傳では、「典要（原則）をなすべからず、ただ變のゆくところ」といつております。一律な原則のあてはまらないところに易の面白さがあるのであります。漢の揚雄ようきゆうという人が太玄たげんという易の模作を作りました。これは易とちがつて原則がきちんと立てられておる。この書物を宋の朱子が「これは典要をなすべき書であつて、かえつてつまらない」と評しています。

三

その他いろいろ問題は盡きませんが、概略は右のようなことに止めて、最後に易が中國人のものの考え方一般とどのような點でつながっているか、重複しますが、おおざっぱに見てゆきたい。

第一に易の象徴と數。これは中國人の考え方一般にあることであります。中國には一般に言語や論理への不信があります。繫辭傳に「書は言を盡さず、言は意を盡さず」とありますが、このことばは實によく使われる。言語や論理に信頼をおかないとすれば、直感的な把握というものが重んぜられ、象徴というようなものが克明な描寫、敘述よりも役立つというふうな場合が出て来る。中國の詩はおよそ最も字數を切りつめた簡潔な詩型で、その一字一字は象徴的な働かしをしているといえないこともない。いわゆる南畫の描寫には多分に象徴的な筆づかいがあります。數の愛好も一般に見られることで、ものごとを三とか五とかいう神秘數でもつて整理したがる。論客が話をするのに、一つ何々、二つ何々、と數でもつて整理して、説得性を増そうとするなどもそれでしよう。

六爻のうち二、五の中の位を重んずること、これもいろいろの書物に説かれることと共通するところであります。中庸という書物にもつばら物事のよきほど、中庸の徳を説き、老子は滿ちれば缺けることを戒めますが、易の考えも、

これら他の書物の根柢にある中國人一般の生活の智慧から出ております。

さきに中、正、應などの原則が必らずしも一貫せず、しかも易はそれを自認していることを申しましたが、そのような例外を許容する幅のある態度は、中國の思想一般にあるおとなの氣風でありましょう。また例外の許容から一步進んで逆説の愛好ということが中國にはある。莊子や老子はその典型で、これはユーモアを愛する心から来ております。易にも多分にそういうところがある。☰☷は天が上で地が下の形でよきような卦ですのに、「否」である。☰☷は天地ひつくりかえつて悪そうなのに天下泰平の「泰」である。易經の六十四卦の配列順は☰☷乾、☷☷坤にはじまっています。これは最も純粹な形の良い卦ですから當然です。終りの方を見ますと☰☷未濟が最後で、☰☷既濟がその前であります。☰☷既濟はすべての爻が正で、當然中と應をえており、最も整つた形で、名前も「すでにわたる」、完成の意味がある。これで易經の最後をしめくればよいものを、最も不安定な形の☰☷未濟、未完成の卦を終りにおく。なぜかと申しますと、「物は窮むべからず」、物には終りというものはない、完成ということはない、だから完成の卦のあとを受けるのに未完成の卦でもつて受けた。こうして未完成の卦を易經の最後におくことによつて、易經全體のあらわす世界というものは、そこで終らずに、さらに無限に生々流轉することが予想されるのであります。これはいかにも逆説的な興趣がある。その他、本文にもいろいろユーモアや皮肉がありまして、易の愛される一つの要素をなしているように思われます。

易の宇宙に變りつつ變らぬ法則性を認める考え方、これも中國人の考え方一般にあるものではないかと思う。たとえば中國では歴史を單なる過去の記録でなく、未來への鑑と見るのが普通ですが、これはやはり世界の現象の中に變りつつ變らぬものを認めている、歴史を繰り返すものと見るからでありまして、易の考え方と共通するところがあるう。

ただ易のような考え方ですと、人間は宇宙の、時間の、大きな循環的な動きに乗つかつて因循しておればよい、と

いうことになりまして、いかにも安全な、處世的には賢明な態度ではありません。しかし、時として人間は大勢に叛逆することが必要な場合もあります。そうした人間の主體性というものはこの因循という道徳からは出て来ないであろう。ここに易のような考え方の限界があるかと思えます。

いづれにしても易は、いろいろの意味で、もつとも中國的な考え方を盛りこんだ書物でありまして、經書だからというだけでなくて、各人各様に楽しみを求める書物として、長い間愛讀されたのも、その故であろうと思われるのであります。

(本稿は昭和三十四年五月二十九日、懷德堂記念講演會における講演の概略である)